

1. 教育の責任

成人看護の対象者は、青年期から向老期まで幅広い年代にわたる多様な人々である。成人期の健康は、生活や環境との相互作用を抜きに語ることができないものであり、個人の「生きる意味」と深く関わると考えられる。成人看護学では、こうした対象者に対応するため、幅広い知識や技術を身につけるだけでなく、対象者がより良い生活を送るための支援方法を常に考え続ける必要がある。

さらに、対象者の国籍、価値観、ニーズが多様であることを認識し、その多様性を尊重しながら感性を高めて接する姿勢が求められる。このような教育の基盤として、「STUDY FOR LIFE」の精神に基づき、国際看護学部の特色である「学士力」「実践力」「国際力」を備えた学生を育成することを目指している。

2. 教育の理念

STUDY FOR LIFE の精神に基づき、国際看護学部の特色である、「学士力」「実践力」「国際力」を持ち合わせた学生を育成する。

3. 教育の方法

急性看護援助論Ⅰでは、様々な手術を受ける周術期における対象者の身体的・精神的・社会的側面を統合的に捉えて、その対象者の手術前後の変化や、退院後の生活を見据えた全人的な看護を学ぶ。学生は同世代以外の方と触れ合う機会が少ないことから、世代が違う対象者をイメージすることが難しい。そのため、具体的な事例や実践的なデモンストレーションを用いながら、対象者の理解を促す工夫を行う。また教員からの問いかけやグループディスカッションなどを行いながら、常に考え続ける姿勢を尊重した双方向的な関わりを実施する。急性看護援助論Ⅱでは、急性看護援助論Ⅰでの学びを基に、事例を用いた看護展開を学ぶ。事例を用いて展開することで、より実践に近く、具体的に考えられるように支援する。また演習やグループディスカッションを取り入れ、学生自ら考えて行動ができるような工夫を行う。急性看護学実習では、急性看護援助論Ⅰや急性看護援助論Ⅱを基に、実際に手術を受ける対象者に看護実践を行う。急性期看護であり、手術を受ける前後で起こり得る身体・精神・社会的変化を捉えて、対象者を尊重した看護が行えるように支援する。また実践した看護を、学生にとって意味づけられるように、学生が感じたことや疑問・違和感等を尊重して関わっていく。これらすべての教育を通して、学生が主体的に学びをすすめられるように、教員は学生を認め尊重する姿勢を重視している。

4. 教育の成果

講義後リアクションペーパーや講義・実習後の学生の発言から、急性期看護（特に周術期）における対象者の状況が刻々と変化する中で、予測して動くことの大切さを学んだ、また全人的に見ようと思っていもいずれかの側面に偏っていることに気づいたなどが述べられていた。また同領域の教員から、講義や実習に対するフィードバックを受け、またディスカッションを通じて、次回に繋げられるように精錬していった。

5. 改善への努力と今後の目標

講義や実習後の振り返りを、教員間で適宜行いながら、必要な修正を重ねている。また学生からの意見も講義後アンケートや発言から抽出して、さらなる改善に活用する。今後は、客観的な評価指標を導入することで教育効果を測定し、改善点を明確化する取り組みを進める予定である。

【添付資料】

シラバス、講義資料、リアクションペーパー、講義後アンケート